

宮城県石巻医療支援。1。伊丹空港から仙台空港へ。到着出口へは、社員通路の様なところを抜けるとそこは、もう出口。トイレに急いだが、そこはプレハブの仮設。テレビで報道されていたような空港が津波でひどい状況と判断出来なかった。



2。空港内の JAL の施設などもなく、ともかく寒い。ロビーには、被災地支援の寄せ書きが多数。被災地への思いに突き動かされながら、車で石巻市石巻中学校へ。津波の瓦礫は、道路だけは片付いていた。



宮城県石巻医療支援 3。空港から高速で移動。阪神淡路大震災の時。三宮に到着した時と全く違うのは、阪神高速が倒壊していたり、巨大ビルが道路をふさいでいる光景がない。若干不思議な感覚とともに石巻中学校へ。がんばろう石巻！



宮城県石巻医療支援 5。石巻中学校。石巻でも高台にある為に直接の被害からは免れている。この地域、石巻エリア 4 を兵庫県医師会が担当している。もちろん同じ兵庫県の薬剤師会、看護協会なども連携。薬剤なども、きちんと整理。



6。教室を拠点として仕様。石巻中学校だよりが目に入った。その通信は、日付が、3月11日。まさに震災の日の「学校だより」。黒板には、翌日の「3月12日の当番の名前」が書かれていた。

7。石巻中学校を拠点とした石巻市の南、エリア 4 と呼ばれていた。当時、学校の再開に向けて避難所の再編成が行われていた。この中学校の体育館には、200 名近い人たちが避難していた最も劣悪で雑然とした避難所でした。



8。石巻中学校は、エリア4では、最大の避難所でした。だとすれば最も整備された避難所の様に聞こえるが、私たちが関与した中では最も劣悪な避難所でした。食事がひどい。これでは避難所でさらに体調が悪くなります。オニギリ1個、ソーセージ、お茶というパターン(T_T)

9。避難所格差。十分な広さ、通路の整理、隣との仕切りなど。石巻中では、アップした画像の様に、すし詰め状態。巡回診療しにくい状況。体育館内の明るさにも影響される様な混雑。結果として布団も敷きっぱなしになってしまう！風通しの良くない環境は、感染症をも誘発。例年に比べて数倍の肺炎数と。

10。避難所格差。石巻図書館。避難されている人は30人を超える。図書館のスペースは、広い部屋もあるのだが、20畳ほどのスペースには、一切の仕切りがない。こういうところでは、以外に元気な人が多い。ただ本棚の間の暗い空間に寝ている人たちも多い(泣)



11。山下小学校。教室ではない部屋に分散して避難されている。一部屋10人程度。一つの空間での仲間意識からか、元気にされていた。2階より上では、もう授業は始まっており、生徒たちの明るい声が聞こえ、気持ちが変われる。先生方ともお会いしたが、元気に寝られておられたが、校長先生は、心身の疲労が強い。

12。石巻図書館。避難生活上のスペースは決して良好ではないが、一日2食の避難所もある中で、自衛隊の支援があり、自衛隊のお風呂も設置されており、スペース以外の環境が整備されていた。



石巻公民館 13。全体として厳しい食事情。まだまだ一日二食の避難所も存在する。パン、オニギリ、コンビニ弁当が主。野菜関係は全くない。薬剤師が、ビタミン剤などを配布しているが、避難所においても健康状態が悪化する恐れさえある。さらなる問題は、メンタルケアである。

▽

14。メンタルケアは、石巻赤十字、東北大学などが、巡回しているが、どうしても不規則となっている様だ。現場で、管理をしている立場のボランティアも交代するので、申し送りが不十分になっており、実態に把握が不十分で、メンタルケアを受けられない避難者もいる。

15。避難所巡回診療。私たちのチームでも、様々な事例があった。事例1。膝蓋骨骨折。地震の時に、骨折していたが、二ヶ月経っている。これまで放置されていた。整形の医師によると、このままでは、足が曲がったままになるので、手術の適応とのこと。石巻日赤へ紹介受診となった。



16. 兵庫県チームは、医師 4 名、看護師、薬剤師、事務方から構成。兵庫県立大学大学院看護学研究科の松岡さんという看護師も参加されていた。添付した「災害時に避難所で高齢者の看護に当たられる皆さまへ」の編集者。

17. 巡回診療。続き。このようなパンフレットを作成される方がいたことは、チームにとっても避難者にとっても意味があった。とても工夫され、実践に沿ったパンフレットある。避難者の食事、排泄、環境、メンタルケアにわたり、わかりやすく整理されている。

18. 続き。巡回しながら、声かけを行って行く中で、最初から、問題意識を持って避難者を観察されていたのだろう。横になっておられる方の異常を素早く見抜かれた。食事情の不十分さ、環境の悪さ、トイレの遠さ、水分摂取不良が誘発した脳梗塞患者だった！素晴らしい看護観察力。

19. 肺動脈血栓塞栓症。肺炎、心不全などなど二ヶ月を経過しているにもかかわらず、救急搬送となる避難者が多く存在する。うわべだけの巡回診療では診断しきれなかった例も多い。声かけだけでは、大丈夫ですと言われる方が多い。腰をおろし、同じ目線で具体的な会話をしてみると反応が返ってくる。これが必要なのだ。

なかには、3 月 11 日に緊急避難時に膝を損傷、チームの整形外科医が、膝蓋骨の骨折を 2 ヶ月後に診断。威信お巻き日赤へ搬送となる例もあった。

20. ギャップ。宮城から戻って TV 報道などを見ていて感じるのがなんとも言えないギャップである。炊き出し、自衛隊支援、芸能人などの支援。確かに意味のある大切なことである。しかしながら、同時に同じ避難所内でも、日の当たらない弱者の存在を忘れてはいけない。各避難所にも格差が存在し、避難所内ですら、格差が存在する。

21. ギャップ。様々な支援が行われるなかで、炊き出しのところまで動きにくい高齢者、避難所の食事に合わない高齢者への問題。体育館から校舎内のトイレまで遠い現実。たどり着いてもトイレは和式しかないところが多い。かくして動きにくい高齢者は、さらに孤立している。

22. ギャップ。孤立する弱者、高齢者。災害避難所は、そもそも高齢者には全く環境的に良くない。避難所から心不全入院され、やっと退院となった高齢者。本来は、施設入所が妥当なのに、施設がない。利尿剤投与にて尿意が頻回でも、トイレが遠い。自然に尿臭により、周りからさらに孤立しやすくなる。

23. 学校の再開が進み、避難所の縮小再編が進行している。それはそれでいい。ただ、避難者の中の弱者は、十分に顧みられていないとは言えない。マスコミは、もっと劣悪な状況に向かって掘り下げ、報道すべきだと思う。上滑りな報道はいらない。これが戻ってからのギャップである。

24. 活動中、もう一つのギャップがあった。仙台、石巻の移動を繰り返す中で、阪神淡路大震災の神戸三宮の駅前に立った時には、いたるところで倒壊したビルが目に入った。ガレキは、まだまだ片付いていないが、見える範囲での被害の現実とのギャップが最終日まで続いていた。それは、最終日にそのギャップが解消される厳しい現実が目の前に現れたのだが。



25. 活動中のギャップ。避難所にいる人たちの厳しい現実と 16 年前の神戸の現実とのギャップを抱えながら活動していた。石巻中学校から望む太平洋は、青く穏やかなようにしか見えなかったからである。

26. 住吉中。私たちのチームが着任時にはこの住吉中学校が最大の避難所となっていた。石巻中 180 名、住吉中 189 名、山下小 39 名、石巻図書館 57 名、石巻公民館 131 名であった。

5/4	場所	AM 9:00-12:00	Nrs	PM 1:00-7:00	Nrs
180	石巻中	山田 小津 松岡			
189	住吉中	山田 小津 松岡			
39	山下小	山田 小津 松岡			
57	図書館	山田 小津 松岡			
131	公民館	山田 小津 松岡			
	日赤心のケアチーム				



27. 住吉中は、体育館の中も整然とし、しきつぱなしの布団もなく、区画の整理もキチンとされ、正面にはテレビも設置。環境が整っていた。石巻中と違い体育館内にトイレ、診察室もあり、体育館から外に一端出て、歩いて行く必要がない。各区画の責任者も決まっていた。自治意識が高かった。

28. 住吉中の診察室内の薬品棚。整理整頓。ここは、石巻赤十字の看護師さんが、遅くまできちんと対応されていた。この看護師さんも家族を失いながら避難者のために献身的に頑張っておられた。





石巻中学校の黒板。

地震の翌日の学級当番の名前が記されていた。

兵庫県医師会の医療救護所 伊丹市民病院の整形外科の先生と。



29. エリア 4 とされていた石巻市南をともに担っていた新潟県医師会のチーム。兵庫県医師会のチームと連携していた。各責任者が石巻赤十字病院にて、毎日の総括を行いながら、翌日の方針を打ち出していた。



30. 診察室の真下にある運動場から歓声が聞こえた。連休明けの月曜日からの「遅れた始業式」に向けて生徒たちが、非難している人たちの車の轍をトンボでキレイにしていた。



医師会チームの引き継ぎ。交代要員は、5名。

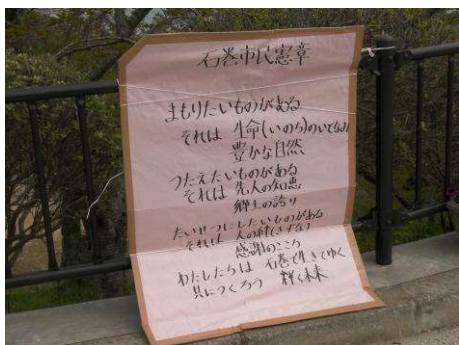


一緒に頑張った。仲間と。兵庫県医師会理事、北村先生、薬剤師、看護師さんたちと。

石巻医療支援最終章 31。活動の中心は石巻市のやや高台にある石巻中学校。運動場から眺めると海は遠方に見渡せる。津波は押し寄せていない地域。当初から阪神淡路大震災とのギャップを感じていたが地図的にも海はすぐそばにあった



石巻医療支援最終章 32。石巻から引き上げる日が続いた。津波の被害を実感できぬままに「日和山公園」に立ち寄ることになった。これまで、桜の名所であり、見事な眺望の公園である。



石巻医療支援最終章 33。

日和山公園。石巻市の海

沿いを見渡せる日和山公園。桜と海を見渡せる市民の憩いの場所なんだろう。そこのあった手作りの「石巻市民憲章」

石巻医療支援最終章 34。

日和山公園。「石巻市民憲章」それは生命のいとなみ。豊かな自然。伝えたいものがある。それは先人の知恵。郷土の誇り。大切にしたいものがある。それはひとの絆。感謝のこころ。わたしたちは、石巻で生きてゆく。共につくろう。輝く未来。



石巻医療支援最終章 35。

日和山公園。震災前の眺望。

石巻医療支援最終章 36。日和山公園。日和山公園から津波の被害を目の当たりにし、額然として言葉を失いました。想像以上に悲惨なというかそれを上回る光景。



石巻医療支援最終章 37。日和山公園から。完全に建物が消失した「中洲」



石巻医療支援最終章 38。

日和山公園から。

孤立した石巻市民病院。

石巻医療支援最終章 39。日和山公園。二ヶ月も経過していたが、南浜町の倒壊家屋には手付かず。復旧の為の道路だけが通れるようになっている。日和山に来るまでは、震災、津波の被害を実感できなかったが、見渡す限りの崩壊に・・・。



石巻医療支援最終章 40。石巻市南浜町。日和山から下ると海の匂いに異臭の混じった南浜町に出る。津波のすごさを思い知らされる。かろうじて立っている建物すら内部は崩壊し、倒壊した建物、ガレキで埋め尽くされている



石巻医療支援最終章 41。仙台空港へ戻る途中に石巻市の南浜町へ立ち寄った。

立ち尽くすとはこのことだろう。津波が乗り越えた防災堤防は、海からは見上げるほど高く、これを超えるということが理解できない現実がそこにあった。その堤防に、生徒が絵を書く道具を持ち、ペインティングを行っていた。



石巻医療支援最終章 42。南浜町の被災地に看板があった。「がんばろう!!石巻」マイクロバスを降り立ち、しばし見入っていた。「頑張れ!石巻!必ず継続支援をするぞ!」という思いを再認識した。鯉のぼりが綺麗に泳いでいた。



石巻医療支援 43。仙台空港へ。空港内には基本的に暖房はない。一時間近く搭乗を待っている間が寒くて仕方がなかった。搭乗受付は、プレハブ仕様で、寒々としていた。

石巻医療支援 44。仙台空港。

搭乗口を抜けると数メートルで外へ。そのまま歩いて飛行機へ



石巻医療支援 45。仙台空港。出発に際して、JAL の職員が見送ってくれた。がんばろう石巻、がんばろう東北！ いつでもどこにいても、心はひとつ！

石巻医療支援 46。その後。帰ってきて日常の中に居ても、やはり被災地に思いをはせている。兵庫県医師会の医療支援チーム派遣は、6月までは継続と決まった。今の2チームを1チーム編成で継続する。表面上の避難所の縮小再編にとらわれず、被災者の目線に立って今後も支援を継続していただきたい。

石巻医療支援 47。阪神淡路大震災と全く違う被害状況を確認してきた。六甲山から海にかけて神戸があるが、全ての地域が津波にあった様な状況なのだ。当然、仮設住宅を作る土地さえないと思う。それゆえ避難生活は長きに渡ると考えられる。継続的支援が本当に必要だ。それぞれの立場でできることを！

石巻医療支援 48。ボランティア。多くの人たちと出会った。地元専修大学の学生。友人と石巻中でのテント生活。数十日に渡って、ボランティアを。テント生活で、一度強風でテントの支柱が折れ、テントが壊れた際には、心が折れたと言っていたが、今も頑張っている。しかし彼自身も被災者。頑張れ！

石巻医療支援 49。「仮設住宅などへの医療支援を！兵庫県医師会へ要請。」と神戸新聞に出ていた。災害では実働部隊として動くことがない「学会」も動いている。循環器学会の医療支援にも手を上げているが、長い目で支援を続けることに異論などない。

石巻医療支援 50。被災地の自治体職員。家族をなくした多くの職員が、職務を全うしようと不眠不休の日々を送っている。医療者も同様だ。疲労はおそらくピークに達している。見かけが元気なだけに、頑張って公務を支える彼らが 二次被害・過労死にならない様に！健康被害に対して十分な配慮を！

石巻医療支援 51。毎年8月に行われている東北一の石巻花火大会！100年以上の歴史。ツイートした中洲で行われる。阪神淡路大震災とルミナリエ。この花火大会も実施の方向で検討されている様だ。8月1日。私も楽しみに待ちたいと思っている。がんばろう東日本、がんばろう日本！頑張れ！石巻！